日本の美術評論家柳宗悦の古代洞窟寺院についての評論『石佛寺の彫刻に就いて』（1919）

ペニー・ベイリー / クイーンズランド大学

本研究プロジェクトの概要

1919 年に日本の美術評論家柳宗悦は、近代で初めて韓国の有名な仏教洞窟寺院である石窟庵を芸術作品として批評した画期的なエッセイ『石佛寺の彫刻に就いて』を発表した。[1]　石仏寺は八世紀の仏教の聖地で、1994 年からユネスコの遺産に登録されており、統一新羅時代（668—935）の新羅王国の古都である慶州の郊外に位置する。

柳のエッセイは東京で 1919 年 6 月 1 日発行の美術雑誌『芸術』に発表された。このエッセイは、読者から好評を博し、後の美術史家や研究者に大きな影響を与えたにもかかわらず、現在に至るまでほとんど研究されていない。一つの例外として、韓国の学者フワン・ジョンヨンによる論文『Oriental Sublime: Sŏkkuram in the Imperial Japanese Landscape』（2014）がある。しかしこの論文は、柳のエッセイを日本の朝鮮半島植民地化の観点から取り上げたものであり、構成やその印象的な異文化解釈に関する学術的な研究に焦点を当てたものではない。

このプロジェクトは、研究者自身による柳のエッセイの英訳に基づき、柳がこのエッセイをどのように構成し、同時代の人々や後の美術史家の間でどのように受け取られたかを初めて包括的に調査するものである。これは、民藝研究又は日本美術史の新たな知見に大きく貢献するものであろう。特に、柳が石仏寺を評価したのは、彼の美術史への影響として最もよく知られている民藝運動を 1920 年代に浜田庄司（1894—1978）、河井寛次郎（1890—1966）、富本憲吉（1886—1963）、バーナード・リーチ（1887—1979）らと確立する以前のことである。柳はこの運動の指導的理論家としての役割を果たしながら、韓国文化に関するこれらの初期の視覚的解釈を基礎として、膨大な著作の規範を完成させたのである。

柳のエッセイは美術史的手法、仏教神学、キリスト教神秘主義などの幅広い知識を駆使して、仏教の洞窟寺院を美術品として鑑定した初めての文章であるという点で画期的である。本研究では、柳がどのような美術史的方法論でエッセイを構成した

[1] 二十世紀まで、「石窟庵 」は「石仏寺 」として知られていた。柳が歴史的な読み方を使うことにした。

か、それを執筆するに至るまでどのような経緯があったかや、その後の日本民芸運動の指導者としての活動にどのような影響を与えたかを大まかに考察する。

方法論的には、本プロジェクトは日本研究、美術史のモデル、韓国植民地時代（1910—1945）の日韓関係研究などを含む学際的な枠組みを採用している。研究の基礎となる確実な批評的基盤を確立するため、プロジェクトの中核となるアプローチは『石仏寺の彫刻に就いて』のエッセイを詳細に精査し、それを裏付ける歴史的・現代的資料を組み合わせることである。また、洞窟寺院の彫像を視覚的に分析し、得た情報を研究に活用する。

研究過程と成果

775 年に完成した石窟庵は、景徳王時代（742—765）の宰相金大城（700—774）の依頼により造られたものと考えられる。この石窟の歴史を示す史料はほとんどなく、あるものは完成後何世紀も経ってから書かれたものである。インドのアジャンタ石窟群や中国の龍門石窟・雲崗石窟のように山肌を削って造られたものではなく、山から切り出した花崗岩の板を数学的に緻密に配置したもので、アジアの他の仏教石窟群とは異なる。また、花崗岩の彫刻を仏教の尊格に従って体系的に配置した左右対称のレイアウトを採用した世界唯一の石窟寺院である。

柳は各像を丹念に分析して、この洞窟寺院が、直線的な特徴を持つ美術品を好む韓国の国民性の出発点であると理論付けた。彼の観察は、植民地時代以降も影響力を持って、多様な石窟庵研究のきっかけとなった。柳のエッセイと現代の記述を比較することで、石窟庵の 38 体の彫像を柳自身の詳細な記述と照合することができた。柳は石窟庵の訪問をきっかけに仏教の徹底的な研究に着手することになる。帰国後、1919 年 2 月に東洋大学宗教学教授に就任する二ヶ月前、そして石窟庵のエッセイ発表の四ヶ月前に、最初の随筆集『宗教とその心理』を出版した。

国立国会図書館では、柳の石仏寺のエッセイを含む柳の韓国に関する 10 編のエッセイをまとめた『朝鮮とその芸術』の刊行 100 周年を記念して 2022 年に刊行された貴重な書籍など、私の研究を支える膨大な資料を見ることができた。また、植民地時代に朝鮮の美術・建築を幅広く研究した学者関野貞による朝鮮美術の同時代論、『朝鮮及満州』などの雑誌記事、『東京日日新聞』（現『毎日新聞』）などの歴史新聞記事にも、石窟庵について詳しく述べられている。

また、日本民藝館と東京国立博物館の資料館で追加資料を入手した。さらに、NF-JLEP の支援により、東洋大学図書館に所蔵されている柳の石窟庵のエッセイに関連する重要な資料も入手することができた。柳が『朝鮮の美術』と題して 1922 年に出版した手製の和装本には、石窟庵の文殊菩薩の写真と図像の詳細が掲載されている。日本全国の図書館に三部しかない貴重な作品である。

研究成果の発表

本プロジェクトの研究成果は学会の出席、研究セミナーの参加、査読付きジャーナルの投稿などを通じて発信していく予定である。

また、この研究を終えた後も、民藝研究の分野で発表を続けることが私の目標である。このプロジェクトで行った研究は、将来計画されているプロジェクトにも累積的な利益をもたらすことになるであろう。

柳宗悦の石窟庵のエッセイの教育・文化教育への活用

言語教育の実践の観点から、柳のエッセイは 20 世紀初頭の文章の豊富な例であり上級（レベル 3）の言語学習に使用できるため抜粋するつもりだ。戦前の漢字（旧字体）や構文、文法的な特徴など、上級の教科書の内容に沿ったものが多く含まれている。また、上級の翻訳クラスにも役立つであろう。

レベル 1 のクラスでは、植民地時代に異文化の美術を通して一生懸命関連性を発見し韓国の人々と友好関係を築こうとした柳は日本人の重要な例として、文化的な議論に役立てることができる。

さらに、洞窟寺院の仏像の分析では、奈良や京都の重要な視覚文化との強い繋がりを示していて、古代の史跡やそれらが現在にどのように繋がっているかについて理解を深めることができる。このような繋がりは、日本文化の授業で探求することができる。

この分野の研究を進めるにあたり、寛大な奨励金と貴重な機会を与えてくださった NF-JLEP Association に感謝を申し上げます。今回の滞在を通じて収集した資料は、何年にも亘り今後の研究に大いに役立つと存じます。

参考文献

Han, Yŏngdae/Kan Eidai 韓永大. *Yanagi Muneyoshi to Chōsen: Jiyū to geijutsu e no kenshin* 柳宗悦と朝鮮：自由と芸術への献身 (Yanagi Muneyoshi and Korea: Devotion to Freedom and the Arts). Tokyo: Akashi Shoten, 2008.

Hwang, Jongyon. "Oriental Sublime: Sŏkkuram in the Imperial Japanese Landscape." *Acta Koreana*, Vol. 17, No. 1 (2014): 29–60.

Katayama, Mabi 片山まび and Sugiyama Takashi 杉山亨司 (eds.). *Yanagi Muneyoshi no kokoro no me: Nihon Mingeikan shozō Chōsen kanren shiryō o megutte:* Chōsen to sono geijutsu *kankō hyaku shūnen kinen* 柳宗悦の心と眼：日本民藝館所蔵朝鮮観連資料をめぐって：『朝鮮とその藝術』刊行周年記念 (The Heart and Eyes of Yanagi Muneyoshi: Korean Works in the Japan Folk Arts Museum: A Commemoration of the Hundredth Anniversary of the Publication of *Korea and Its Arts*). Tokyo: Aiwādo, 2022.

Sekino, Tadashi 関野貞. *Chōsen geijutsu no kenkyū* 朝鮮芸術之研究 (A Study of Korean Art). Keijō (Seoul): Chōsen Sōtokufu Takushibu Kenchikusho, 1910.

Yanagi, Sōetsu 柳宗悦. *Chōsen no bijutsu* 朝鮮の美術 (Korean Art). Tokyo: private printing, 1922.

_____. "Sekibutsuji no chōkoku ni tsuite" 石仏寺の彫刻に就いて (The Sculptures of Sŏkpulsa [Sŏkkuram] Grotto) [1919]. *Geijutsu*, Vol. 5, No. 2 (1919): 91–121.

写真：日本民藝館・駒場、東京